

学校俳句研究 No.8

☆日本学校俳句研究会☆会報 平成 26 年 11 月

リレーエッセイ「心に残るあの句あの時」④

「十七音の中に映る風景」

卒業式池の氷を割り遊ぶ

5年生の担任をしていた。なかなか難しい面を持つ子の多いクラスであった。自分を素直に表現することができず、行動も荒んだ子が何人かいた。

Wくんは、「めんどくさい」と言っていて決まって卒業式の練習をサボった。誰にもそんな時期はある。しかしどの子もみんな気持ち澄んでいる。掲句はWくんが卒業式を間近に控えた頃作った句である。自分の気持ちや行動を素直に表現している。二十二年度の教員人生の中で最も気持ちを揺さぶられた句であった。

そのWくんに先日街でばったり会った。歩道で信号待ちをしていた私の前にWくんの運転するセダンが停まったのだ。Wくんは助手席側の窓を開けて、「先生ー」と元気に声を掛けてきた。黒目がちのきらきら輝く瞳は十数年前と少しも変らなかつた。

足立区立千寿小学校 山本 新



俳句勉強会紹介

月々の高得点句を紹介します。

六月勉強会

薫風やバス待つ少女の単語帳 田付 賢一
六月のチヨークの音は海の青 小山 正見
夏兆す十六歳の定期券 山本 純人
校帽の駆けよつてくる濃紫陽花 宮川 範子

七月勉強会

炎風のピントの合わぬカメラかな 小山 正見
飛び石に午後の影踏む晩夏かな 山本 新
Yの字の埋めつくしたる夏木かな 白石久美子
緑陰や一眼しつと俳句帖 木原小百合
玉砂利のつはじける炎暑かな 宮川 範子

九月勉強会

大の字に寝てふるさとのいわし雲 金子 嵩
泣きながら登校の手にねこじやし 加藤 誠則
ペダル漕ぐ小さな秋を嗅ぎ分けて 黒崎喜代美
少年の武器は翼と団栗と 渡邊 樹音

十月勉強会

サボりたい授業もあつて秋の空 山本 新

学校俳句研究⑧ 発行日平成二十六年十一月二十五日/日本学校俳句研究会

◆代表☆小山正見

◆編集者☆松本芳明

◆イラスト 瀬在恵里

小山正見 oyamamasami@gmail.com

【日本学校俳句研究会】

連絡先 江東区教育委員会学校支援課

http://gakkouhaiku.sitemix.jp/

楽しからずや学級句会

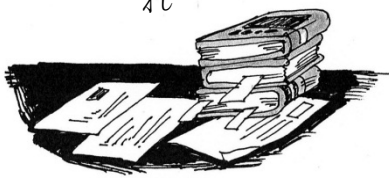
日本学校俳句研究会 顧問 高橋博夫

孔子の『論語』のなかに、「知之者不如好之者、好之者不如樂之者——これを知る者は、これを好む者に如（し）かず。これを好む者は、これを樂しむ者に如かず」という、よく知られた一節があります（雍也第六）。「如かず」は及ばないの意。碩学吉川幸次郎の解釈によれば、

「知る」とは、そのものあるいはその事柄の存在を知ることであり、この段階では、対象は、全然自己の外にある。「好む」とは、対象に対して特別な感情をいだくことである。対象はまだ自己と一体でない。「樂しむ」とは、対象が自己と一体となり、自己と完全に融合することである。（朝日選書 中国古典選『論語 上』1996.10）

これは優劣を述べた内容ですが、別の見方をすれば「知る↓好む↓樂しむ」という学習のプロセスとしてもとらえることができるように思います。学びの究極の目的は、「樂しむ」ことにあるといえるでしょう。さらに孔子は、「学びて時にこれを習う、また説（よるこ）ばしからずや。朋（とも）あり遠方より来たる、また樂しからずや」（学而第一）と述べています。学問について志を同じくする友だちと語り合うのは「樂しい」というのです。まさに、そうした「樂しみ」をかなえてくれるのが学級句会なのではないでしょうか。その時の精一杯の知力や気力、想像力をはたらかせて各自が俳句を作り、その場で共に評価し合ったり味わったりできるからです。さながら、おいしいものを一緒に食べるように。

（俳句誌『梓』『航』同人、文芸誌『第三次 同時代』同人、俳人協会会員）



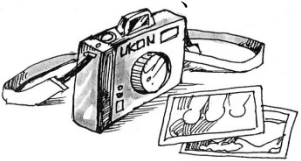
日本学校俳句研究会夏合宿報告

宮坂静生先生の松本を訪ねて

去る八月十六日より三日間、日本学校俳句研究会の恒例夏合宿が行われました。この会は、三年前に東京都江東区立八名川小学校の小山正見元校長先生を中心に立ち上げた、俳句授業研究会です。こどもたちには俳句を教えるためには自らも俳句を詠むことが必要と考え、現代俳句協会の俳人の方々に協力をいただき、月例勉強句会を行っております。

夏合宿の一年目は式根島、二年目は南三陸町でした。そして今年、現代俳句協会ジュニア研修部長の川辺幸一さんに、松本市にお住まいの現代俳句協会会長、宮坂静生先生を紹介していただき、長野県に決まりました。

宮坂先生は私たちの会の活動にとっても関心を抱かれ、ご多忙の中を三日間ずっとお付き合い下さり、ご指導下さいました。



特急列車に乗って一日目

初日朝、新宿駅に集合して九時の特急あずさで出発。第一ミッションは車中で二句を詠むことです。談笑もつかの間、それぞれに歳時記と手帳を手に車窓を眺め始めました。松本駅でバスに乗り継ぎ浅間温泉『菊の湯』に辿り着くと、蓮の花咲く宿の玄関で、なんと宮坂先生自らが出迎えて下さいました。太梁のどっしりとした、木造りの温もりと趣のある空間に会員一同が圧倒されました。

午後からの講義と句会は、宿の大広間で行われました。威厳のある宮坂先生の風格にかなり緊張しましたが、温厚なお人柄にすぐ心解されました。宮坂先生の講義資料の冒頭には、『やさしさ』とは何かを知る、これが俳句をつくる究極の目標——と記されておりました。句会では全ての句に句評を下さいました。合宿参加者の一団には日々熱心に句作をしている人もいますが、俳句のレベルは様々です。それでもどの句にも思いがあり良いところがある

と話され、全ての句の良い点を褒め、添削をして下さいました。

特急列車夏の地軸を傾けぬ 山本 新

夏の電車ぐわんぐわんと山せまり 舟山由美子

充実した講義と句会のあとは、湯船に身を委ね、料理に舌鼓を打ちながらの談笑となりました



安曇野の丘の上で二日目

二日目は貸し切りバスで、まず松本民芸館へと向かいました。全国各地から集められた名もない職人の手作りの日用品は、大地の恵みと人の温もり、研ぎ澄まされた美を感じるものばかりでした。北安曇野の創造館の丘に立つと、陸軍特攻隊員の学徒だった上原良司のいのちのことばの碑がありました。目の前には広大な連山と稲田、足元には蟋蟀が鳴いていました。あいにくの曇天で景色は霧がかっていましたが、この地に住んだ良司の無念を訴えているか

のようであるせない思いでした。山葵田で秋の水に触れ、碌山美術館では生命感溢れる彫刻と情操教育に身を賭した白樺教師の回顧展を見学しました。故人の思いと情熱がひしひしと伝わってきました。昼食に手打ち蕎麦をいただき、句会場の豊科の図書館へ向かいました。その地に生きた故人に目を向け、興味と問題意識を持つことが大事だと教わりました。そしてまた、訪れた地をほめる、挨拶句を詠むということと教えていただきました。



野紺菊軍馬の墓に供へあり 知念哲庵
こんにちは信濃の稲穂行儀良し 續橋尚子

帰り道、杉田久女の墓に立ち寄りお参りをしました。ひっそりとした小さな墓石でしたが、虚子の筆跡で久女と記されており不思議と大きな存在感がありました。

治生まれのドイツ製オルゴールを聴かせていただき、宿を去りました。宮坂先生のご厚意で、旅鞆を先生の事務所に預けさせて頂き、国宝松本城に上り、戦国の世に思いを馳せました。蔵造りの城下町を案内していただき、老舗の喫茶店で休憩。民芸品やお菓子の土産店まで紹介していただきました。事務所に戻り旅鞆を受け取り、お別れとなりました。

六層の暑さ重ねし天守かな 小山正見
山つとやさしきを知る木曾の秋 阿部郁恵

今回の合宿の宿の紹介、コース、昼食、会場の手配まで、すべてして下さいました宮坂先生には感動と感謝の気持ちでいっぱいです。

充実した三日間、宮坂先生と長野の大地に俳句の真髄を学びました。このことを心

に刻み、今後の句作、子どもたちへの俳句指導に活かしていきたいと思えます。

宮坂静生先生、同行して戴きました現代俳句協会の川辺幸一さん、渡辺樹音さん、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

日本学校俳句研究会幹事 阿部郁恵

- 太梁の闇ごつごつと送り盆 宮坂静生
- ゆりの木のみどり白樺教師たち 川辺幸一
- 稜線に四肢を踏み夏を夏の雲 渡邊樹音
- もう少し待って下さい青りんご 松本芳明
- 御狐刈る信濃の道は静かなる 足田文晴
- 安曇野にすくと立てり花カンナ 太田 薫
- 恩讐はどの秋雲になりしかな 原田 恵
- 虫時雨壺に甕に徳利に 木原小百合
- トンネルを抜けて広がる葡萄棚 森 鈴子
- 霧あがる稜線一步前に出づ 舟山由美子
- 睡蓮の花おだやかな宿を去る 米田かおる
- 街路樹の濃き葉重なる夏の雨 沖本礼子
- 良司の碑飛ぶを急ぐなつばめの子 續橋尚子
- 新涼の信濃に賞でる壺屋焼 知念哲庵
- 連峰は天に繋がる雲の峰 阿部郁恵
- 木椅子六脚車座に晩夏かな 山本 新
- 土瓶割恋いこがれたる信濃かな 小山正見

旅の山つと三日目

あつという間の最終日。ロビーにある明